

白朗の乱 (三)

——河南の第二革命と白朗——

鳴本信子

一、第二革命期の白朗の活躍と革命派との関連

白朗は一九一三年六月中旬の禹州での大勝利後、その名声を高めたが、七月三日には、荆紫関で王天縱の弟王天佑を破り、続いて浙川県、賈家寨を破った。賈家寨は、辛亥革命が勃発した時、陝西、湖北、河南の富豪が金銀財宝を運んだ所である。

当局は白朗に八千元の懸賞金をかけ、陝西、湖北、河南三省の五千人あまりの兵をもって、これを討伐しようとした。

七月一四日、両軍は賈家寨の東で会戦。官軍側の死傷者はきわめて多く、白朗軍は官軍の弾薬十箱を奪いとり、一六日には師崗鎮（内郷城より五十里）を破り、一八日には鎮平石佛寺（山麓のとれる所で富裕な地）を包圍し、さらに南陽方面へと進んだ。この時、白朗の率いる部隊は千二百人。各地の「土匪」も白朗に呼応した。例えば、鎮嵩軍に弾圧されて

からしばらくの間、南山の巢穴に隠れていた申新寬、房県・保康県の「土匪」戴玉衡、胡占元、徐焜、それに、鄧県の孫玉章などである。^①その頃の白朗の様子は、

白匪の仲間が多く、その勢いはきわめて大きいが、このことはたいしたことではなく、それよりもむしろ、その行動が忽然としていて、軍隊が追跡するのが難しいということが大きな問題なのである。軍隊たちは、白匪と言っただけで皆驚き、白狼と聞いただけで皆逃げ出してしまふのだ。こんな状態で、しかも軍隊は比較的少ないときにいるので、土匪がこれに乗じてたちまち大乱を醸成するのである。^②

というように、兵隊や軍隊の胆を震え上らせるほどの力をもっていた。先の論文でみたように、辛亥革命後の一九一二年から一九一三年の「革命」の收拾期の政治状況の中で、投降路線を拒否して、民衆とともにあくまで革命の貫徹を願う白朗義軍の活躍は、まさしく白朗という河南の一民衆が、袁世

凱権力に真向から対立して「白狼」とよばれて恐れられてゆく過程を示すものでもある。そして、その道はそのまま第二革命へと直結してゆくことになるのだが、第二革命時の白朗の活動は、一九一三年五月三十一日の唐県城の攻撃、六月一四〜一五日の禹州攻撃の勝利にひき続いて、七月〜八月にかけて活発に展開されてゆく。今、その活動を年表にまとめておくと、次のようである。

第二革命中の白朗の活躍

月・日	記 事	出典 (一九一三年)
7・1	開封弾薬局、爆破事件(本文参照)、死者十四名。 弾薬局の爆破は白朗が人を派してやらせたもので、久しからずして省城圍攻の説あり	「民立報」七月三日 同右、七月七日
7・3	荆紫関占領、浙川県、賈家寨を破る。「白狼は」浙川を攻取し、各県呼応す。全省は皆、民軍の範囲内にあり、以て(河)南省の独立を扶助するに足る。将来、分兵して北京を討つに難ならず。」	「支那」九月一日、「民立報」七月十日、五日、「民権報」七月十六日。
7・8	申新寛、数百人を連れて、延秋寨内に突入。	「民権報」七月十九日
	房県、保康県「土匪」、戴玉衡、胡占元、徐焜等、城に據って白朗と結託、応援す。	「申報」七月十五日。

7・14	三省連合軍五千人と白朗、賈家寨の東で会戦して弾圧せしむ。	「順天時報」七月十二日。
7・16	白朗、師崗鎮を破る	同日。
7・18	白朗、鎮平石佛寺を包圍、南陽へと進む 「白狼すでに荆紫関より進んで鄖陽による。武昌大いに震う。」 民立報、白朗の評価を一変(本文参照)	「民立報」七月十八日。 同右
	「白狼来たりて省を攻めるの説あり。張督大恐慌。」「聞くに白狼、近日中に河南省城を攻撃せんとす」	同右、七月二十日。
	「河南歸德府地方に大隊あり。北軍のクーデタにより勢い甚だ猖獗。聞くに、白狼と相連ね、張鎮芳、処置する法なく、雷震春に救援を急電す」	同右、七月二十一日。
	「白狼、開封に迫る。聞くに張鎮芳すでに、逃げ隠れると。」	同右
7・20	黄興の白朗への手紙(本文参照)	「白朗起義」二二六頁。
7・21	河南省議会、緊急会議を開く。	「民立報」七月二十一日。
	この頃、王天縱は白朗を帰順させるべきとの説を袁に説く。張鎮芳、これに反発(本文参照)	「白朗起義」六十一頁。

<p>「白狼すでに民軍と連合す。軍容甚だ壮なり、同右、七月紀律もまた厳なり。連日、南陽、陝州一帯を二十三日。攻取し、豫鄂陝三省袁軍を牽制す。」「十八省代表討袁軍大元帥を公拳」「袁世凱、豫督張鎮芳をして京漢鐵道黄河鉄橋を意の如く防護せしむ」</p>	<p>7・22 7・23</p> <p>拐河西北の白草溝の戦い。この時、数十名の捕虜が白朗死亡説を主張。</p>	<p>7・23</p> <p>「京営総稽查王天縱君、現に袁總統の命を奉ず。駐鄂北軍二十六各師、続々と九江に赴き二十八日。姜軍もまた湖南へ出動す。特に近衛兵第二師を率いて来鄂せしめて駐留し、かつ、京漢鐵道を守りて治安を保たしむ。先頃、該師すでに到り、四營を漢口に分駐。王君は二十三日に漢へ来る。先日、すでに黎公に電告す」</p>	<p>7・25 7・26頃</p> <p>湖北、劉鉄らによる沙洋兵變、白朗と連絡してともに鄂西討袁軍の旗を上げるように求めた。しかし、その後、白は攻撃目標の鄖陽を攻めずに、突然、開封へ向かう(本文参照)</p>	<p>「京中、伝聞す、討袁軍總司令黄興、すでに白狼を河南都督に任ずと。」</p>	<p>「黄總司令、起義各省に電告して云う。ちかごろ河南の確かな消息によると、白狼軍はすでに</p>
<p>「順天時報」 八月二日。</p>	<p>「申報」七月二十八日。</p>	<p>「民立報」七月二十四日。</p>	<p>「順天時報」八月十七日、 「時報」八月九日。</p>	<p>「民立報」七月二十六日。</p>	<p></p>

<p>に鐵道電線をたたき毀し、張鎮芳はすでに逃れ、討袁軍にとつては具合がよい。」</p>	<p>「袁世凱は河南護軍使雷震春を召して来京せしめ、直接に會つて機宜上將銜を与え、各軍十八日を支配せしめんとす。もし切迫した状況があればすぐに事を行うことを准す。聞くに白狼の名声が目まじに大きくなり、張鎮芳はひそかに逃れたとの消息あるに困り、この拳あり」</p>	<p>7・30 7・31 8・5</p> <p>「黄君(臨汝県知事黄樹成)、白沙に匪党集合せるにより、偵緝隊百人防軍百人、民団二百人を引率して、ひそかに白沙へ赴き、匪党三十余人を捕まえる。次日、又、汝河村へ到り、著者な土匪十三人を逮捕。八月五日、聞くに白圍、汝に到るの消息あり...」</p>	<p>「京漢鐵道局、手紙を出して云う、昨(二十三)日)大中華民国日報特電欄内に、彰徳府は白狼が都督府および武器庫を攻撃占領し、京漢鐵道もたたき毀されて、現に南北の消息通ぜず等の語を載せているが、本局がただちに巡警の長に電報を發して調査したところによると、決してそのようなことはなく、該路は目下常の如く通車す云々。」</p>	<p>8月初旬</p> <p>「土匪」陳殿升、黄高山、嵩県の車村、孫家鎮六十二頁</p>
<p>同右七月二十八日。</p>	<p>「北京日報」九月三日</p>	<p>「時報」八月一日</p>	<p></p>	<p></p>

<p>を占拠</p>	<p>8月上旬 白朗と弟の白圃、百泉山で七千人の周符麟軍と戦つて勝ち、多くの大砲、武器を得、襄陽へ到る</p>	<p>「京漢鉄道は：袁が軍隊、武器を南へ輸送するので、この鉄道に最も力を入れているところであるが、現にすでに白狼の支隊にいたるところ破壊されて二カ月内には通車し得ず」</p>	<p>「京漢鉄道の、南は信陽より北は黄河へ到る所は、みな、白狼の支隊に切断され、二カ月以内に通車する能わず。京電では水に損なわれたというが確かならず。」</p>	<p>「袁、派する所の河南軍は倪軍を助けんとすも、すでに帰徳府附近で白狼の支隊にさえぎられて南下する能わず。倪軍の救援を待つも到らず、又、兵隊の給料も着かざるを以て、軍心離散して、大半は敗れくずれる。」</p>	<p>8・7 駐宛劉鳳桐司令起義、白朗軍とともに南陽を占拠。新蔡閻子固、宛城の劉軍と一緒に起義。(ただし、劉鳳桐の処刑については七月二十日、八月二日の説もあり—筆者註、本文参照)</p>	<p>「南陽一帯を占拠す。一方では進軍して黄河鉄橋の南北を守備し、以て袁軍の南下をふせぎ止め、一方では同志を召集して出示安民して討袁を声明した。」</p>	<p>「南陽府劉鳳桐と白玉琅「按ずるに即ち白狼」聯合して独立を宣布す</p>
<p>「白朗起義」</p>	<p>「民立報」八月六日</p>	<p>「民立報」八月八日</p>	<p>「民立報」八月八日</p>	<p>「民立報」八月十日</p>	<p>「民立報」八月十一日</p>	<p>「民立報」八月十一日</p>	<p>「民立報」八月十八日</p>

<p>「(岷山は)河南の要塞にして、地勢の險悪なること武勝関の十倍なり。民軍、ちかごろ、この山を得て、山頂に大砲を設けて、袁軍の撃破に備えた」</p>	<p>8・14 「匪首宋一眼と浙川に開戦。当時、匪は約千人、官軍四百人：この役で死んだ匪は四十余人、降服した匪は百余人。浙川境内の村莊民寨十一拠を奪回、脅かされて従つた者は許してやり気分一新して再起するように命ず。村莊二カ處も全て降伏す。聞くに、周は兵を率いて荆紫関の境界へ行き、三、五日以内に鄂軍と余匪を平定せんとす。」</p>	<p>8・15 申新寛、趙得勝、紅登科等八百余人を率いて八月一五日に洛陽の彭婆、竜門等を占拠。</p>	<p>先月の白朗逮捕の河南都督の黎元洪あての電報中の白は本物ではなく、にせ者である。</p>	<p>8・21 王天縦の族兄王成瑞、同村の胡泰岳、北京へ来て、汝、洛一帯の「土匪」の様子を訴える</p>	<p>8・23 王天縦、段祺瑞あての手紙にて、王の家族や村を「土匪」の攻撃から守ってくれるよう要請。</p>	<p>展志学等十余人の「匪党」、捕えられて銃殺さる。</p>	<p>「白朗の勢力、現に、ほとんど全省に散らばり、袁系の將校たちはこれに対処する方法を計画せるも、結局、勢力敵せざるをもって、敢えてこれと戦わず。」</p>
<p>「民権報」八月十二日</p>	<p>「北京日報」九月六日</p>	<p>「白朗起義」六十二頁</p>	<p>「順天時報」八月十七日</p>	<p>「白朗起義」六十二頁</p>	<p>同右</p>	<p>「時報」九月四日</p>	<p>「民立報」八月三十一日</p>

この年表には、本文にない資料は、なるべく載せ、本文にあるものは要約して記した。なお、ここに載せた「民権報」については、黄広廓「有関白朗起義的一些資料」(史学月刊一九六〇—二)中より引用した。

年表を通観して分かることは、まず前提とすべきは、河南における第二革命の主体は白朗軍であったということである。そして、第二革命時の白朗軍の動きをみると、大きく分けて次の三方面を目標としていたようである。第一の目標は、河南省の西南部と湖北省の北西部の接する境界地方、第二の目標は河南省の首都である開封方面、第三の目標は京漢鉄道である。

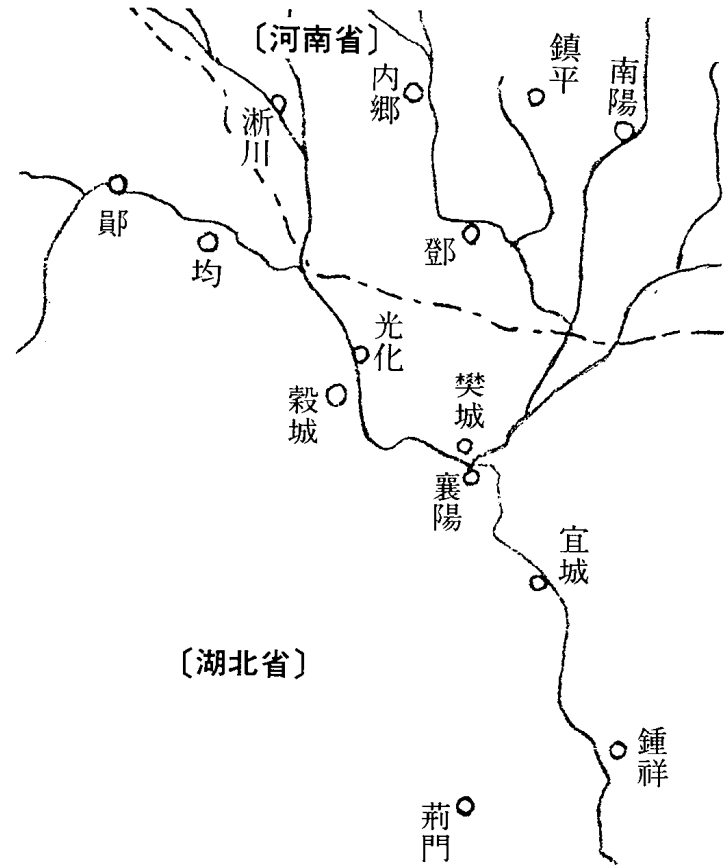
まず、第一の目標に関しては、前述したように、七月初旬から中旬にかけて、荆紫関、淅川を攻略して、湖北省の鄖陽へ向かって進軍し、武昌を震撼させていた。³⁾ところで、淅川は辺境の地、山深く竹林がうっそうとしており、東は鄖県に、北は内郷に、西は河南の盧氏県と陝西の商南県に接し、南は湖北の均鄖の両県と隣り合っている所である。白朗は淅川県境の西坪、荆紫関などの各地に出没、擾乱して、湖北省の境界へ進んだ。鄖県の孫玉章も呼応し、湖北の解散兵は、襄陽、樊城、隨、鄖陽の間に潜伏しており、まさに動き出そうとしている状態であり、彼等を行ったり来たりして気脈を通じ、ますます大人数となつてふくれ上がり、星火燎原せんとしていた。⁴⁾勃勃たる革命の息吹きがこの一帯を覆っていた。こうした白朗軍と湖北省西部の「土匪」・革命軍の結びつき

は、袁世凱政権を左右する第二革命の中心的勢力の一つとなるはずのものであった。この間の事情を『支那』にみると、次のようである。

襄陽鄖陽二府管下の各県は悉く大小の匪害を蒙らざる無く、天門、潜江、饒祥、樊城等の諸県既に占領せられ、長陽、南漳、穀城等の諸県亦危く、匪勢漸く漢川、当陽、沔陽、兩県下に瀰漫せんとし、西北一帯を挙げて匪徒の横行に委せるやの觀あり。又東南江西省境界に近き通山、咸寧、蒲圻一帯も亦時に匪徒出沒し、地方人民の派兵彈圧を要請するもの切なり。若し夫れ此れ等の匪徒にして有力なる首領に由つて統一せられ、豊富なる武器の供給を得、東南及西北偏偶の山地用塞に割據して持久の策に出でんか、微力なる湖北軍隊に於て之れを鎮壓する事決して易々たらざるべく、以て南方革命派再起の機会を作る亦全然不可能に非るべし。況んや匪徒中には国民党の使嗾に由つて起るものあり。退伍兵の多数亦之に加はるに於てをや。殊に前に隨県に據つて屢々官軍の討伐隊を苦しめ、今や河南境上に一時鋒鋒を潜めつつある白狼の党羽と勾結せば、勢更に侮るべからざるべく、引いて楊子江沿岸各県下に潜みて静に形勢を觀望せる無頼の匪徒、及退伍兵の徒が之に響応せんか、実に容易ならざる大混乱に陥ることと言ふべからず。⁵⁾

こうした状態の中で、七月二五、六日頃、湖北省の沙洋で反乱を起こした旧同盟会會員、第八師の三十团团長の劉鉄は、ひそかに使いを白朗のもとへ派遣した。そして、白朗が鄖陽

〔地図1. 河南・湖北西北部の境界地方〕



を、劉鉄が荊門、襄陽を占領して、ともに鄂西討袁軍の旗を上げるように求めたのであった。ところが何故か、白朗は、途中で計画を変更して、鄖陽を攻めずに、突然、河南省の首都、開封へ向かう戦略をとることになるのだが、そのことは、次の史料の中に述べられている。

河南・湖北の著名な土匪白狼は、先日、河南軍統領（今の旅団長にあたる）周符麟に痛烈に攻撃されて、盧氏県から荆紫関に逃げ、湖北・河南・陝西の三省の境にある要害の地、沙洋に拠る。時に、劉鉄はすでにひそかに人を遣して、

白匪と連合し、白朗が鄖陽を攻撃し、劉鉄が荊門、襄陽を占領して、ともに鄂西討袁軍の旗を立てることを求めた。

一方、黄興もまた人を河南に遣って、白匪に働きかけ、河南都督の職を委ね、立派な武器と現銀二萬両を与えた。白匪の宗旨は、もともと清王室を回復することであるから、袁世凱討伐にも賛成で、黄興の使いが利を以て誘うと、喜んでこれに応じ、ここに於いて、計画を変更し、鄖陽を攻めずに、開封を擾乱したのである。従って、このことは全く、白が都督の職を得たいと欲したからに外ならない。⁶⁾

この史料によると、白朗が鄖陽を攻めずに開封に向かった理由は、黄興が河南都督の職という利を以て誘い、白朗がこの餌にとびついたからということになるのだが、果たしてそうだろうか。先にみたように、河南省を竊取するために、河南省の首都である開封へ進撃することは、白朗の第二革命時の第二目標であったわけで、白朗が都督なりたさに急に進路変更をしたわけではない。劉鉄と約したという鄖陽攻撃を中止した理由は他に求められねばならない。では、その理由とは一体何であろうか。沙洋兵変の時、劉鉄は荊州攻略を湖南の蔣翊武と約束していたため、荊州へ来ていたが、うまくゆかず、沙洋に帰る途中、丁鎮守使率いる南京軍に迎え撃たれ、さらに運悪く山つなみがおこり、そのため二万三千二百人以上が壊滅したという。劉は白朗のもとへ走ろうとしたが光化県で捕えられた⁷⁾。このため、白朗は劉鉄らと連絡をとることができなくなり、鄖陽攻撃を中止せざるをえなくなったので

ある。やむを得ず、白朗は第二の攻撃目標、開封へ向かったわけである。白朗が省の首都開封を窺うということは、七月の初め頃から、新聞に伝えられているが、一九一三年七月一八日、二〇日の民立報には、「白狼来たりて省を攻めるの説あり。張督大恐慌！」とか、「聞くところによると、白狼は近日中に河南省域を攻撃せんとす」といった記事が載せられている。河南省帰徳府の北方軍もクーデターを起こし、白朗と連携して開封へ迫る状況となり、河南省議会は、七月二一日に緊急会議を開いて対策を協議した。

白朗の開封進攻の報は、北京にいる袁世凱にとっては由々しき一大事であった。殊に白朗が第三の攻撃目標とした京漢鉄道は「南方征伐の大勢に重要な関連があり」、袁世凱としては何としても守らなければならぬ「北軍の命脈」であった。つまり、京漢鉄道は、革命派を弾圧するために、袁世凱が武器・弾薬と軍隊を南方へ運ぶための最重要路線であった。袁世凱は河南都督張鎮芳に京漢鉄道の黄河鉄橋の厳重防衛を命じたほか、総稽查の王天縦に近衛兵第二師を率いさせて湖北へ送って京漢鉄道を守らせた。また、京漢鉄道防禦の責任者に王毓秀旅長を、蠢動する河南西南部の動きに対する責任者に南陽鎮の周符麟中将、鎮嵩軍統制の劉鎮華をあてた。このほか、「乱党」が軍隊に働きかけた時に訴え出た者には褒美を与えたり昇級させるとか、民間の武器を取り上げるとか、旅行者の荷物をチェックするなどのさまざまな方法を講じているが、いずれも滔滔たる白朗ら民衆の動きを阻りとめること

はできなかつた。白朗の声势が日ましに大きくなってゆく中で、河南都督張鎮芳逃亡のうわさまで広まり、袁世凱は、河南護軍使雷震春を上京させて各軍を支配する権限を与えた。こうして、七月の終わり頃には、討袁軍総司令の黄興が、すでに白朗を河南都督に任命したといううわさが北京にも広まり、黄興は、起義している各省に「河南の確かな筋の情報によると、白狼軍はすでに鉄道や電線をたたき毀し、張鎮芳はもはや逃げてしまつて、討袁軍にとっては、まことに好都合である」状況だと述べている¹⁰。事実、八月上旬には、北方系の新聞は水のためと言っているが、民立報によると、「白狼の支隊に切断されて」南は信陽から北は黄河に到るまでの間の京漢鉄道は、二ヵ月間、通車不能の状態に陥つたという。また、袁世凱が河南に派遣した軍隊は、帰徳府の附近で、白朗の一隊に阻ぎられて南下することができず、このため、応援を待っていた軍隊は潰走したところもあつたという。このように、「北軍の命脈」、京漢鉄道は、到る所で白朗らに切断されたが、中でも黄河鉄橋はしばしば攻撃目標となつたので、八月中旬には、該橋の両側はさらに厳重に防禦されたという¹¹。この京漢鉄道攻撃作戦は、当時、漢口で反袁世凱活動を行っていた革命党人、鄒永成との連絡のもとにおこなわれたものであつた。鄒永成の回想によると

河南の白狼は熊嗣鸞、賈誼を代表として派遣し、漢口に来てさせて私と面談させた。私は白狼を湘、鄂、豫三省聯軍先鋒司令とし、賈誼を河南へ帰らせて、地雷で黄河鉄橋を爆

破させ、袁軍がひき続き南下できないようにさせようとした。しかし不幸にも、地雷を埋めている時に袁軍に逮捕され、極刑を以て同党について供述させられ、熊嗣鸞も彼も同時に殺されたのである⁽¹²⁾。

ここに出てくる熊嗣鸞（熊思羽）について説明しておこう。

彼は、辛亥革命時、河南の禹州、魯山、郟、寶豊などの義侠の士を集め、モーゼル銃五千を得て義勇兵に与え、五人一組の隊伍を編制したというから、あるいは白朗もこの義勇兵の中にいたかもしれない。それはともかく、彼は武昌に行つて北伐遊撃師長に任命され、第一路先鋒隊として南陽に迫つて戦うこと一〇余日、これに克つ。民国成立後は、学事や実業方面で活躍し、禹州や魯山県の委員に任じていたが、袁世凱の横暴が日ましに激しくなるのを見て、職を捨てて第二革命に参加した。彼は湘南実業廳々長、劉紹襄の紹介によつて、北方諸軍に悲憤慷慨して説いてまわつた。漢口を通つた時に、先の資料にあるように、鄒永成が彼に五千元を与えて河南に帰らせた。彼はそれに自分の金、三萬金を加えて、鄭州に機關をつくり、部下の姚黄、劉果を京漢鐵道の各駅に分駐させたので、豪傑たちはことごとくこれに帰したという。急いで起義し、南方の応援をしようとしたものの、なお人数が少なかつたので、東方の海岱や煙台へも行き、何人かの同志と連絡をとつてひそかに金銭や爆弾を父親の熊珉へ送つた。というのは、熊珉もちよつど開封で事を起こそうとしていたからであつたが、鄭州に帰つてきたところで、事洩れ、捕えられ

た。匪人と結託した罪により、彼は殺され、その家もメチャクチャになつた。一九一四年旧曆正月二三日（陽曆二月十七日）のことであつた⁽¹³⁾。このように、熊嗣鸞はもともと河南の人で、殊に、禹州、魯山、寶豊等の地域とかわりが深い人だつたことがわかるし、白朗との結びつきも深かつたことが類推できる。「白朗起義調査簡記」によると、彼は、一九一二年に河南都督張鎮芳によつて「招安委員」に任命され、魯山一帯へ行つて、各義勇軍を「招撫」する役目で、白朗もその対象の中に入つていたという。しかし、熊は革命に同情し、この機会に白朗と關係をつけ、ひそかに工作して、白朗の命を拝し、武漢に来て、ブルジョア革命党人と協議したとある。そのブルジョア革命党人が、先の鄒永成であつた。

以上のように、第二革命期の白朗軍は、河南西南部と湖北省との境界地方、河南省の首都の開封、そして京漢鐵道を主な攻撃目標として活躍した。この戦略は、湖北の「土匪」や解散兵、反乱軍と結び、この地を占領するとともに、開封を攻略して河南省を取り、以て北軍に対峙するとともに、京漢鐵道の破壊を通じて袁世凱軍の南下を防ぐことにあつたと思われる。そして、軍事上、實際行動上で、南方の反袁世凱軍を支持し、協力し、北方の袁世凱軍が南下しにくくし、袁世凱の第二革命の鎮圧を困難にさせたのであつた。この点は第二革命時における白朗軍の役割として大きく評価されなければならぬ。まさに、白朗軍は第二革命の重要な一環として、たぐいまれな活動をしていた。それを可能にしたのは、先に

述べたように、白朗に寄せる民衆そのものの期待にはかならない。七月二八日、袁世凱は張鎮芳に打電して、「該匪、乱党の指揮を受け、擾乱が鉄道にまで及べば、南方征伐の大局に重要なかわりがある」と述べ、この事態をいたく憂慮している。⁽¹⁴⁾

ところで、この第二革命中の白朗と「革命派」との関係は、如何なるものであったのであろうか。袁世凱が各軍隊に白朗を捕えるようよびかけた大總統令の中には、

近ごろ、河南、湖北各都督等の報告するところによると、海外へ逃亡した輩が、その徒党の凌賊、劉天猛、劉承烈、熊灌香等をそれぞれ派遣し、結託して煽動したことがわかったということだ。そして、白狼らに司令都督の各名目を授け、孫文が手紙を書いて、白が派遣した竇憲民等の紹介により、ひそかに武器を購入して援助を与えたのだ。このため、白匪の勢力は急速に大きくなり、悪辣兇悪さがいよいよ甚だしくなってきたのである。⁽¹⁵⁾

とあって、「海外へ逃亡した輩」、つまり孫文や黄興が凌越らの国民党員を派遣して白朗と結託したこと、また、孫文が白朗へ武器援助も与えたと述べている。当時の新聞なども、「南省から派遣された多くの党人が白狼と結託した」とか、「南方の人が白の虚名に動かされて、人を派遣して連絡した」とか伝え、事が成就したあかつきには、報酬として白に河南都督の職を与えることを約束したと述べている。⁽¹⁶⁾そして、黄興は、解散兵を「煽動」して、白朗集団に加入させ、軍法部を

以て白朗らを統率し、その結果、「あらゆる各省の軽薄な文士ども、法を犯す匪賊どもが多くその中に身を投じた。：該党はまた各省の盗賊、匪賊とも氣脈を通じている」とも述べられている。⁽¹⁷⁾袁世凱としては、革命派と白朗を無理にでも結びつけて、両方同時に弾圧しようという意図が明白であるから、これらの記事もいくらかさし引いて考えなければならぬ、事が極秘裡に属することから、具体的な真相は解かりにくいものの、国民党内「革命派」の凌賊、閻子固、熊嗣鸞、夏誼、そして白朗の尊信するところとはならなかったらしいが孫浩など、実際に白朗と密接なかわりをもった人々が存在したことは確かである。一方、白朗のほうも、すでに五月の段階で、「現に白狼は五省を下すの行あるを以て弾薬が足りず」、仲間の禹勝海など数人を駐馬店へやって武器を調達させ、「もし、唐、泌等の処を占拠することができれば、高蠡、宋一眼と一体化して南方と通じ、以て大挙を図ろう」と宣言しているように、南方と連絡して第二革命を遂行する意図は、かなり早くからあったようである。また六月末には、白朗が派遣したという陳光有なる者が、銀一〇両を持って商人に扮し、南方へ行って軍隊の様子を探ろうとしたが、この時南下した者二〇余名、多くの者は武芸者に扮し、白布のポケットを暗号とし、入党の時はいかるべき人の紹介を必要としたという。⁽¹⁸⁾また、この頃、「白匪は：道々、偉人の名義をかりて、仲間によびかけ、名声が次第に高まった」といわれるように、孫文に傾斜していたふしがある。白朗はかつて一回ならず、長江

攻撃を願ひ、孫文輩下に改編されることを願つて、「隊伍がうまく編制されたあと、私に一個団を下されば、河南攻撃をひき受けましょう」とも述べたといふ。

以上のように、当時の「革命派」と白朗とは互いにある程度の交流があつたことがわかるが、それをもつともよく示しているのが、黄興の白朗あての手紙である。資料には孫文も白朗に手紙を書いたとあるが、残念ながら、それは今、見ることができない。第二革命が勃発した直後の一九一三年七月二〇日、黄興は次のような手紙を持たせて、二人の部下を白朗のもとへ派遣した。その手紙には、次のように書かれている。

拜啓、貴下が湖北・河南の間に義拳を提唱して以来、到るところ風靡し、豪客は敬服し、志士も呼応、将来は中原を掃き清め、元凶を滅ぼし尽くすでしょう。貴下のその広大にして偉大なる功績は、後世まで朽ち果てることはありません。すまい。現在、東南の各省はみなすでに独立を宣言し、江西では袁軍に戦勝すること五回、蘇軍も徐州で袁軍とさかんに戦つて勝利しています。今、北方には蒙警あり、江西もまた力を合わせて前進して攻撃しています。袁軍は大軍で道を分けて南下しており、幾内の地はからっぽなので、虚に乗じてすぐにそこをたたきつぶせば、必ず勝利が得られます。貴下は、湖北、河南の間を占領し、機会を見て進撃し、河南を竊取したら如何でしょうか。また、鉄道の多くを毀すことができれば、彼らの進路を阻むことがで

き、その功績はまことに少くない。さらに進んでいけば、このたびの出兵は、専ら討袁して、吾が民の幸福を謀るためのものであります。こちらとしては兵隊の給与や武器は与えるものの、両方ともというのは援助できないので、馬料と食糧は少しは民間から得なければ不可能です。しかし、その場合、必ず正義にかなつた行為でなくてはならず、やたらに取りたててはいけなしいし、軍の支出はきまりに従い、地方をそこなうような悪感情をなくし、人々に我々の行いを然りとわからせてこそ、実際に弔民伐罪（罪のある者を征伐して民を安んずること）の意味があります。そうすれば、人民は喜んで従い、共鳴する者も多く、大局をたてなおすことができるでしょう。今、私の手紙を携えた潤菴、夏煥三の二君が貴下のもとへ参上しました。御会見いただき、事態がより進展するようにして下さらんことをお願いします。風のうわさにたよりを出したものの、言いたいことも尽くせませんが、以上、お願いまで。勳安。

江蘇討袁軍總司令黄興記。

このように、先述した第二革命時の白朗の戦略（湖北・河南境界の占領、開封攻略による河南省の制圧、京漢鉄道の破壊）は、黄興の、この依頼に沿つたものであることがわかる。そして、白朗が第一の攻撃目標である河南西南部、湖北西北部一帯で活動していた頃、孫文は、武昌から秘そかに武器を運ばせて白朗を援助しようとしたが、白朗の行動は風の如くあちこちをめぐるゲリラ活動で、その上、北洋軍があとをつ

けて到る所に駐留していたため、この援助は成功しなかったと「白朗起義調査簡記」に述べられている。「このごろ南方が派遣してきた党人の多くが、巨額の資金を携えて皖豫にそれぞれ赴いて運動し、軍界呼応す」という軍事密偵の報告や、「黄興はかつて白狼軍に軍費二〇萬元を取りあつめて交付し、それによって白の擾乱を助けたということだ」というような記事が順天時報や時報などに載せられており、黄興ら革命派の連中が白朗軍に多額の金や武器を与えたとされるが、はっきりしたことはわからない。「記白狼事」の著者喬絳五は、「民党方面、実質的な支援を欠く。孫中山先生はかつて白狼に手紙をやり、凌鉞を派遣して上海で連絡をとらせたが、実質上の援助はなかった」と述べている。前にみたように、この時期、白朗と革命派の戦略はぴったり符合し、革命派側の白朗援助の意志はみられるものの、実質的な資金や武器援助という点では、ほとんど無きに等しい状態だったといえるのではなからうか。いや、むしろ、白朗に報酬として河南都督の職を与えるというような発想自体に、当時の「革命派」の限界が示されているのではなからうか。それはのちに述べるように、当時の革命の原動力ともいべき「土匪」とよばれる民衆に対する「革命派」の見方の中にも、はっきりと示されている。王宗虞氏が述べているように、当時のブルジョア革命党人と白朗との関係は、やはり「微弱なる連係と合作」としかいえないようである。⁽²⁴⁾

さて、以上みてきたように、白朗軍は河南における第二革

命の担い手として、縦横無尽の活躍をしてきたわけだが、この間、王毓秀は、河南都督あてに、すでに白朗をうち殺したという勝利電報を送っている。⁽²⁵⁾これは、七月二二日〜二三日にかけての拐河西北の白草溝での軍と「土匪」の戦いで、軍や守望社に生けどりにされた数一〇名の捕虜が一樣に、「白狼は鄂境胡里の一戦ですでにうち殺された」と自白したこと、白朗の仲間に入り込んでいた密偵の張老莫なる者によって「白がうち殺されて南陽礮宗西方にひそかに埋められた」という情報にもとづいている。しかし、八月一七日づけの順天時報は「先月、河南都督が黎公に、すでに白をとらえたという電報を打っているが、それはにせものである、本当の白ではないということだ」と述べている。⁽²⁶⁾前述したように、白朗が攻撃目標を鄖陽から開封へと大きく転換したこと、劉鉄が南陽へ逃れて白朗のもとに身を寄せようとした途中で王安瀾の部下にとらえられたこと等の一連の動きの中で、このような誤報が生まれてきたものと考えられる。

二、河南国民党人の起義と白朗

ところで、白朗が河南の第二革命の実質的な立役者として活躍していた時、南陽に駐留していた劉鳳桐と、新蔡県の閻子固が相ついで挙兵し、河南の第二革命はクライマックスに達した。この起義は、いかなるもので、人々は、これをどのように受けとめたのだろうか。民立報上に次のようにある。

駐宛劉司令鳳桐が七日に起義を宣言し、白狼大軍と一緒に
なつて南陽を占拠した。同志を集め、告示を出して人民を
安んじやわらげて、討袁の大義を声明した。人民、歓喜せ
ざる者はなかった。

新蔡の閻子固も挙兵し、宛城の劉軍と連合して起義し、討
袁民軍の声势はいよいよ盛んである。連合して兵を集め、
黄河鉄橋の南北を押さえ、それによつて、袁軍の南下をふ
せぎ止める計画である⁽²⁷⁾。

また、

南陽府劉鳳桐と白玉瓊（按ずるに即ち白狼）聯合して独立
を宣布す⁽²⁸⁾。

とある。

まず、南陽の劉鳳桐の起義から考えてみよう。劉鳳桐とは、
いかなる人物か。『重修正陽県志』に載っているところによる⁽²⁹⁾
と、原名は紹武、字は慶瀾、龍興寺の人。武漢の武官学校、
保定の北洋軍官学校で学び、国民党（同盟会—筆者註）に入
つて革命を鼓吹。辛亥革命の時には、兵士を率いて各地で血
戦し、しばしば殊勲をたてたという。また、奮勇軍北伐隊総
司令となり、南陽などで活躍。共和成立後は、陸軍の五十九
团团長（团长は連隊長にあたる）となり、泌源、桐柏、泌陽
などの諸県に駐留し、白朗彈圧の任務を与えられた。この県
志の編纂者は、劉の白朗「彈圧」を高く評価しているものの、
多くの資料に散見されるところでは、劉鳳桐は白朗を憎から
ず思っていたらしい。以前、白朗が確山西方の洛山で包囲さ

れ生きるのぞみもないほどであったが、八〇余人の仲間と生
命からがら、夜はこの上なく険しい要害の地を越え、つるを
よじ登つては下り、重圍を突破し、その途中、軍隊が運送し
ていた弾薬数千を奪つて、泌陽県境の堡子寨に脱出したこと
があつたが、その時、「五十九团团長劉鳳桐、その勇敢なるを
喜び、人を遣して、白に降伏するよう説得し、白もまた承諾
した」と資料に述べられている⁽³⁰⁾。しかし、その時にはこの件
は実行されず、のちにまた、白の降伏を説きに行つたが、そ
の時点では、策にはまるかもしれないことを恐れた白が、将
校二人を砲撃して傷つけ、劉軍は大敗北した。この時から、
白朗は降伏の考えを断念し、広く「土匪」たちと結んで、桐
柏、唐県、隨県へと赴いたという。その後も、劉鳳桐輩下の
兵士が「匪」と通じ、白朗に追隨していると民立報も含めた
当時の新聞などが苦々しげに批判しているところをみると、
劉鳳桐自体も本気で白朗彈圧を考えていないし、その部下た
ちも、「一営は明らかに匪に附し、…ここにおいて剿匪の兵は
敢えて怠戦し、通匪の兵は白狼に附和す⁽³¹⁾」という状態であつ
た。この五十九団などの団は連隊と同じで三営から成つてい
たが、五十九団では一営（約五百人）が「匪に附」し、この
りの二営が「命令をきかない」と当時の新聞は伝えている⁽³²⁾。
さらに「白朗の乱」^(一)（中国民衆史研究会「老百姓の世界—中
国民衆史ノート第四号、一九八六年六月所収）の中で述べた
ように、当時、河南の兵隊と「土匪」の関係は、行つたり来
たりの友人の交際関係に等しく、部外者からみれば確かに兵

と「匪」なのだが、その実、かれ等は親友なのであった。だからこそ、劉鳳桐が白朗と合同して起義した時、「人民は歡喜しない者はなかった」のである。「土匪」と革命軍との結びつき、そして再び、あの解放への夢……。人々のその期待は、しかし、短い夢に終わった。先の『重修正陽県志』には、第二革命の時、黄興はひそかに劉鳳桐に奮勇軍北伐隊を組織するよう依頼したが、その委任状が誤って他の河南軍の所に投じられてしまったので、袁世凱や張鎮芳の知るところとなり、魯山城で武装解除を強制され、劉鳳桐は殺されたとある。ただし、その日附けは、六月一日（陽曆八月二日）と記されている。陰曆の六月一日は陽曆の七月一四日にあたるが、他の諸資料からみて七月一四日起義は早すぎるようなので、陽曆八月二日のほうが正しいとすると、陰曆ではこの日は七月一日なので、六月一日は七月一日の間違いと思われる。いずれにせよ、民立報の伝える八月七日起義とは多少のずれがある。また、王毓秀が張鎮芳に出した電報では、

三十日、すでに命により、劉鳳桐および余文会を軍隊の前で処刑した。魯に駐留の兵隊六百余人はすでに武装解除して、解散させ、軍隊に護送させて帰郷させた。劉鳳桐が唐に駐留させていた營の二百余名も銃がなく、すでに潘知事、龍督隊官にこっそり手くばりさせて、すぐさま法を執行し、騎馬隊をひき連れて、殲滅に赴いた。³³

とあり、七月三〇日にすでに劉鳳桐は処刑され、その部下も武装解除されたことになっているが、これも、八月七日起義

では、つじつまが合わない。八月七日起義を伝える民立報上の河南電報は、八月八日の南陽府特電、八月一六日の開封特電であるが、七月下旬から八月月上旬にかけてのくわしい事情を説明してくれる資料が今のところ見い出せない。八月七日起義というのは、あるいは、劉鳳桐が殺されたあと武装解除され唐殺を免れた解散兵たちの蜂起だったのか、あるいは、秘密裡に劉鳳桐軍壊滅を策したのちさらに革命軍の一網打尽をはかる権力側の策謀にのせられてしまったものなのか、あるいは、混乱の中で劉鳳桐軍と国民党や民立報との連絡に何かの行き違いがあったのか、真相はわからない。劉鳳桐が七月の末か八月初めに殺されたのだけは確かなようである。ところで、河南都督の張鎮芳は、辛亥革命の時からこの劉鳳桐に対してうらみを抱き、折りあらばと機会を伺っていたらしい。前述したように、武昌起義の時、劉は革命軍の下級將校に任じていたが、さらに湖北民軍中の河南籍の官兵が組織した「奮勇軍」に参加して、湖北より南陽を攻略した。この南陽攻略で張鎮芳にうらまれ、張はこのため、唐県陥落を口実に、王毓秀に命じて、唐県に駐屯して防備にあたっていた团长の劉鳳桐を処刑したのである。こうして、南陽で白朗とともに起義せんとした劉鳳桐起義は、あえなく権力者の手にかかって息の根を止められてしまった。

次に、民立報上にある新蔡起義とはどのようなものだったのだろうか。まず、この起義の中心人物、閻子固とはいかなる人物であろうか。いくつかの資料をもとに、特に辛亥革命

期の頃の閻に重点をおいてみておこう。³⁴

閻の本名は閻夢松、字が子固で新蔡県の人。度胸がよくて知謀に富み、また義侠心に厚かった。彼は清朝による政治的不正を憎み、革命による徹底的改革を志し、その名声は日ごとに高まった。彼は武備学堂の学生だった頃から、劉積学（河南で最初に革命を主張した一人で、大河書社を創設して「河南雜誌」を発行）とともに革命活動をおこなっていた。同盟会の河南支部が成立すると、開封南洋公学がその秘密機関となり、休みになると、学生たちは故郷へ帰って革命思想を紹介したが、これは、新蔡県においても盛んだったという。新蔡県の秘密機関は劉芬佛の私塾におかれており、閻は毎日ここで、革命思想の伝播方法を相談していた。ところが、袁某なるものが『支那革命運動』『三十三年落花夢』の二書を以て当局に密告したため、閻らは汝陽で逮捕された。この時は、数一〇人の同志によって助けられ、一時、日本へ渡って孫文に会った後、緑林馮国嶺に投じて、その中に革命運動を広げ、党員を送りこんで、軍隊と緑林とを結びつけた。しかし、河南における辛亥革命は頓座し、河南同盟会は救援書を陳其美へ送った。そして、上海で武器を調達し、次の四隊を組織して態勢をたてなおした。その一つは閻子固、劉芬佛らを含む河南北伐隊、二つめは安徽省より河南を側面攻撃せんとする威武軍、三つめは西の奮勇軍（河南人が武漢で組織した北伐隊で、李雨霖の協力を得て、新野、鄧州、南陽などで活躍）、四つめは東の淮上軍（安徽の張匯韜が率いた）であつ

た。閻子固はのちに淮上軍に参加し、淮上軍副司令となり、歩兵一營、大砲数トンを携えて、三河尖より新蔡県へ進攻、県の東南部にある三盆口を下した。こうして西の河南・陝西連合軍と合同して清軍の後路を断つ予定であったが、たまたま潁州が倪嗣冲に攻め落とされたため、固始、商城へひき返してそこを占領したところで、南北和議が決定されたのである。民国が成立して、閻は常務所総辦、汝州知事となった。

以上のように閻子固（閻夢松）は、辛亥革命期に河南で大いに活躍しているが、特に彼の故郷である新蔡県を基盤として革命をおしすすめ、第二革命期には再びこの新蔡で起義することになったのであるが、では、この新蔡起義とはいかなるものであったのであろうか。のちに一〇月二日に閻は逮捕されてしまうが、その時の供述によると、新蔡起義の概要は次のようなものであった。³⁵

袁世凱を推戴して大總統とすることは、革命派の人々の不満とするところであった。しかし、軍事力の差により、一時的には推戴せざるを得ないというものの、一方では人を各省に派遣して革命の続行を企画し、第二革命を行なう計画であった。閻は黄興の命令により河南に来て、都督府秘書長李敏修すなわち李時燦とひそかに往き来した。李は都督に閻を極力推薦し、都督も閻に軍職を与えることによって閻を籠絡しようとした。閻のほうも政界を利用しようとして、常務所総辦となり、さらに汝州知事となった。五月に朱丹陞とともに南京へ行き、張蓉英等と討議を重ねたのち、再び河南へ戻り、

軍隊に運動し、白朗と結託して起義する役目を受けもった。同時に、前新蔡県知事王文同ともひそかに接し、もし成功したあかつきには、王を河南民政長に挙げる密約をかわし、王もまた承諾した。一方では、新蔡県の国民党人の馬漢傑らと新蔡独立を計画し、家僕の劉玉（劉玉亭）を臨汝県へ赴かせ、その差役（官庁の下級役人）楊萬青等に運動して、武器と金を岳城一帯に運んで起義した。まず新蔡で独立し、さらに潢州（光州）、息県、項城などを攻め、壽州を応援して、ただちに北伐に出向いて、袁世凱を打倒し、黄興を擁戴しようとした。

このように「閻子固の供述は多く黄派の底蘊（ていいうん）に発す」と言われるように、黄興を大總統に擁立しようとする黄興派の色彩が強いと思われる。閻は黄興の指示を受け、河南政界の中に入りこみ、また、軍隊や白朗に働きかけている。この新蔡起義は、はじめは「声勢人を驚かせ、大いに人の注目するところ」となったが、結局、袁軍に敵せざるを知り、八月六日には閻も三〇余人の仲間とともに変装して逃れ、張鎮芳は彼に三千元の懸賞金をかけて行方を追った。³⁶

このように、国民党人による新蔡起義も、もろくも潰え去った。なぜだろうか。その理由の一つに、閻の自供の中にある都督府秘書長李敏修（李時燦）と新蔡県知事王文同との関連がある。閻が常務所総辦になるにあたって、都督府秘書であった李時燦は張鎮芳都督に閻を極力推薦している。従って、「李の嫌疑ははなはだ深く」、河南都督の餌を以て誘われたの

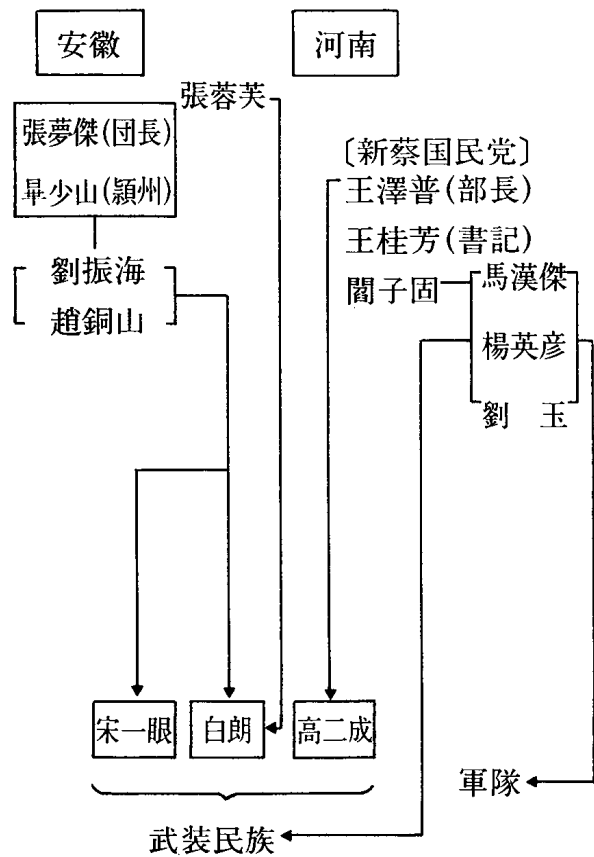
ではないかと疑われていた。³⁷ 李時燦なる人物は、河北の汲県人で学務公所の議長を何年も続けていたので、弟子や友人が学界に多かつたが、「その人となり利禄心旺盛にして一定の宗旨なし」と言われるように、清末には教育費を使いこんだり、張鐘瑞ら河南の革命派を密告して惨殺させた一方、共和が成立すると今度は「国民党の勢力を慕って、国民党毛印相の介により孫黄と接触した」という具合であった。機に敏にして一くせも二くせもあり、あちこちを窺って餌のありそうな方へ自由自在に走りまわるとぶ鼠的人間の典型であり、一九一三年一月都督張鎮芳が李を河南教育長に任命した時、河南の人々は大反対運動を展開した。その後、李は都督府に入り、秘書となって張のブレインの一人となっていた。³⁸ 李のこうした機に敏なる利禄心を利用して権力内部の崩壊を企図したためとはいえ、このような李と閻との関係に、この新蔡起義やひいては当時の国民党の位相をうかがい知ることができよう。この事件の発覚は「大怪物」李時燦の野望を挫き、さらに「政界の李党もまたついにあとかたもなくなり、敢えて専横をなさず。これもまた河南政界の大変化である」という結果をもたらした。³⁹

次に、閻の自供の中にみられる王文同との関連であるが、ことが成就したあかつきには王文同を河南民政長とする約束をしたという。その時、王文同は新蔡県の知事であった。王は九月には開封県知事に転任していたが、十月ははじめの閻子固らの逮捕のニュースに、波及を恐れて出奔したが、その後、

鄭州で捕えられた。⁽⁴⁰⁾

このように、閻は「平日専ら官僚に附和するを以て能となし、故に極めて民党に入れられず」といわれたような人物まで利用して権力者の中に入りこみ、李時燦を河南都督の、王文同を河南民政長の餌で誘って、新蔡起義をはじめ第二革命を成功させようとしたのであった。もちろん第二革命を企図する閻子固ら国民党人も、革命遂行に当って連帯すべき仲間としての「土匪」や兵士にも目を向け、閻自身も白朗と結託する役目も受けもっているし、また、この新蔡起義に連座してのちに逮捕された十六名の「乱党」の供述を調べてみると、穀物商の張蓉芙や劉振海、趙銅山らは主に「土匪」とよばれた武装民衆（高二成、宋一眼、白朗ら）に働きかけ、閻をはじめその「家僕」の劉玉や馬漢傑、楊英彦ら新蔡国民党人は主に軍隊に運動しているようである。⁽⁴¹⁾ その働きかけの概要を図示すると下図のようになる。

しかしながら、ここに示された武装民衆と軍隊と国民党がうまく結び合つて有機的に作用しうるだけの論理や戦略や戦術を国民党がもち得なかつたこと、つまり、国民党員個々の犠牲的活躍は個々には散見しうるとはいえ、⁽⁴²⁾ 国民党と民衆との乖離、国民党と権力者との癒合等が、新蔡起義など各地で起こっていたであろう個々の国民党員による起義を散発的なものにさせ、ひいては第二革命を頓挫させた大きな原因と考えられる。第二革命期の白朗軍の攻撃目標の一つであった湖北西北部の「匪徒の横行の予想」を述べた『支那』の記者の



観測は、この意味では的を得たものであった。記者いわく「惜い哉、彼等は全然烏合の衆にして、統一を欠き武器に乏しく、三四政治上の不平より之れに投ぜるものなきに非ざるも、皆之れ取るに足らざる末輩にして……一時猖獗を極めつつある西北一帯の匪徒も久しからずして鎮定せらるべく、国民党が之れと連絡して有力なる後援を与ふるが如き事は、目下の處四周の情形に照し殆んど不可能と観るべし……」⁽⁴³⁾と。「烏合の衆」として放置されている民衆の革命的エネルギーと国民党との距離は相当に隔っているのである。現に、新蔡起義の中心人物、閻子固自身が辛亥革命後、「匪の名前をよく知っている」が故に、「治匪（匪賊をおさめる）」の任務を担って民

衆の前に出現していたわけであるし、⁽⁴⁴⁾ 辛亥革命期に「土匪」を「革命の健児」とよびかえた民立報は、第二革命期には又もや、これまでの「土匪・白狼」観を突如、百八十度転換させている。すでに述べたように、国民党右派の機関誌である民立報は、つい先日まで、白朗を「土匪」として非難攻撃し、河南都督の張鎮芳の治安能力のなさという点で、白朗を反張鎮芳キャンペーンに大々的に利用して、袁世凱政府がもつと「匪」を取り締まるように叱咤激励していたのだった。ところが、第二革命起ころや、「聞くに、白狼軍の紀律ははなはだ厳しく、決して土匪的行動なし。以前、河南で群れをなしていたのを匪と見なしたのは、国家への報告のためやむを得ずそうしたのだ。」⁽⁴⁵⁾ と言いわけをし、

白狼はもともと呉禄貞の旧部下で、軍事知識にはなはだ優れ、呉が刺されて憤激して官を去り、在野の豪傑と連絡して、呉のための復讐と民国の悪賊を除去せんことを誓った。なぜなら、白狼は呉の殺害が実は袁世凱の使喚によるものであることをよく知っていたからである。⁽⁴⁵⁾

と、第二革命への白朗の参加の正当性を証拠だてている。このような、白朗に対する民立報の評価の豹変ぶりは、「土匪」と糾弾されていた白朗らの側からみると、この調子のよい変節ぶりの中に、あくまで真の革命を願う人々との共感から出発したのではなく、ただ単に第二革命の力として白朗ら民衆を利用しようという国民党側の人々の下心が、まる見えであったということであろう。都合のいい時だけ「土匪」を「革

命の壮士」ともち上げて利用するような民衆観では、とうてい民衆の心を得ることはできまい。白朗軍の中で秘書となった孫浩という「革命派」のインテリが、白朗に尊信されるどころとならなかつた所以も、このあたりにあつたのではなからうか。この人物は、一九一三年に魯山へ行き、巡防營に運動して起義したが、失敗して殺害されてしまったということだ。⁽⁴⁶⁾ さらに、民立報は、七月二三日には次のように述べている。

白狼すでに民軍と連合す。軍容甚だ壮たり。紀律もまた厳なり。連日、南陽、陝州一帯を攻撃し、河南、湖北、陝西三省の袁軍を牽制している。この間に皆謂う。河南人はまだ袁と關係を離脱してはいないとはいふものの、すでに一致して民軍に味方していると。白狼が占拠している地勢は非常にすぐれており、四面の布置もきわめて妥当なものであり、袁軍はきつと戦うこともできないであろうと思われりと。⁽⁴⁷⁾

民立報の評価している白朗は、その軍事活動上の成功面だけで、袁世凱、張鎮芳支配下の河南の民衆の苦悩、そこから民衆の代弁者として立ち上つた白朗らの行動の意義などはほとんど理解されていない。王宗虞氏が述べられているように、「彼等が注意しているのはただ単純な軍事活動のみであり……革命大衆と真に結合して人民大衆を動かして革命闘争をおこなうことを願いもしなかつたし、また、そうすることもできなかつたのである。……彼等はただ「革命」を空談する

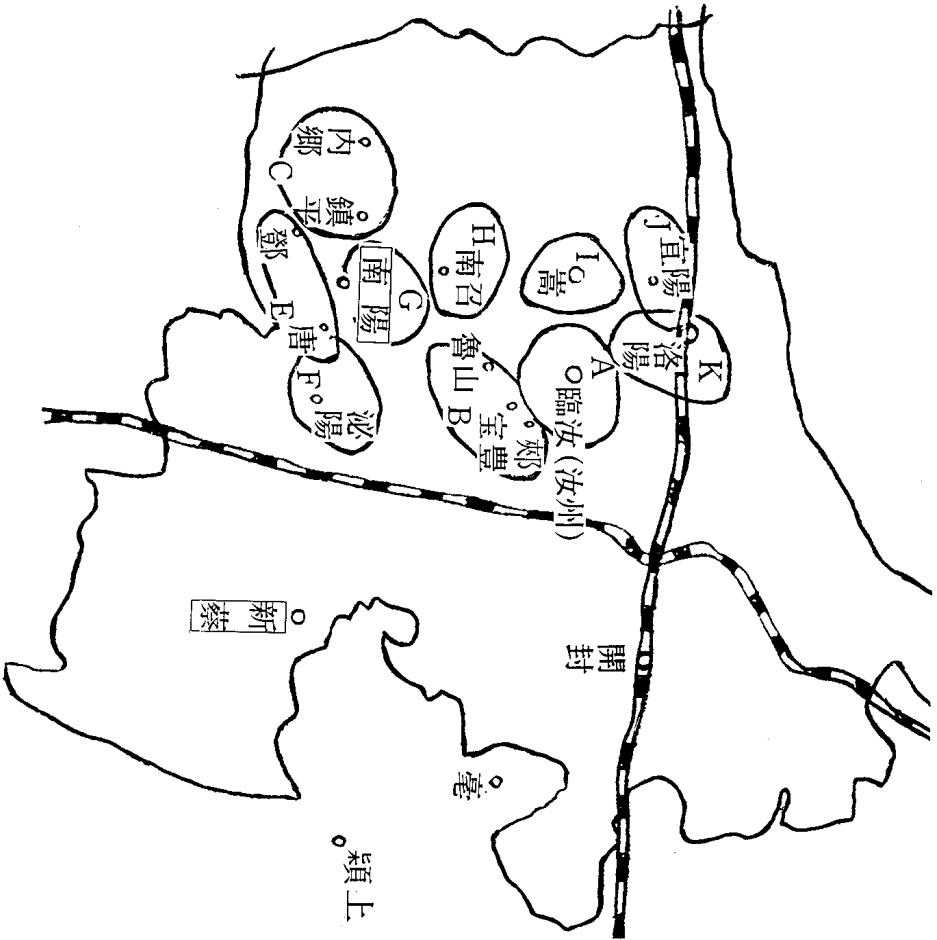
だけで、なぜ革命をするのか、どのように革命をするのかに至っては、全く明確な政治綱領を提出しなかつたのである。⁽⁴⁸⁾あくまで、真の革命を願う民衆と、その民衆に依拠しえない国民党とのコントラストは、例えば、次の対比の中に於いてもみることができる。「新蔡国民党が乱を起こした当初は、知事に印を渡すように迫り、とても威勢がよくて大いに人の注目するところとなつたが、はからずも省の首都から一營を派兵することになつてから、該乱党の胆裂け、官軍の到るを待たずに逃れ去り、人っ子一人いないありさまで、官軍が到着した時には新境にはすでに一人の乱党もいない。乱党の胆、かくの如くして、まことに笑うべきなり」といわれたのに対し、閻が招いた「匪党」渠魁□、蕭志福、展志学らは「勢いはなはだ猖獗をきわめ」、郭寨を占領して根拠地とし、九月三日に大挙して攻城することを決めた。その後、四時間にわたる激戦ののち、郭寨は官軍に破られ、展志学等十余人は生けどりにされて銃殺された。⁽⁵⁰⁾この対比の中に、第二革命時における国民党と民衆の関連が如実に示されている。このように、当時の国民党が「土匪」とよばれた武装民衆の世界に匹敵するだけの力をもち得なかつたことが、当時の「土匪」の代表ともいべき白朗の突出性をますますきわだたせることとなるわけである。

五月下旬の唐県城の攻撃、六月中旬の禹州攻撃、そして七月から八月にかけてのこの時期、白朗の部隊は河南の三方面を攻撃目標とし、實際上の革命軍として縦横の戦いを展開し

ていた。八月上旬には、百泉山という所で、周符麟と白朗軍が戦っているが、周軍七千人に対して白朗軍はわずか二千人。白朗の弟の白圃が朝七時から午後四時までの戦闘を指揮して、ついに周軍をうち破り、大砲数トンとおびただしい数の武器を奪い取つたという。⁽⁵¹⁾このように、第二革命の過程で、白朗軍のめざましい活躍ぶりをあちこちに散見することができ、ついに八月の終り頃には、「白狼の勢力、現にほとんど全省に散らばり、袁世凱系の將校たちはこれに対処する方法を計画したもの、結局、勢力敵せざるをもって、敢えてこれと戦わず」という状況となつたのである。以上で明らかのように、河南における第二革命の事実上の担い手こそ、白朗軍とそれに呼応する「土匪」とよばれる武装民衆であつたことがわかる。今、河南における第二革命の過程で、燎原の火のように広がつた「土匪」の分布図を地図に示してみると次頁のようである（地図2参照）

八月一〇日、王天縱の弟、王天佑の都督あての陳述書によると、彼ら「土匪」は「各々百余人、数百人くらいで、行つたり来たりしており、各地に出没して擾乱し、人質を拉致したり、燃やして強奪したりしている。その外の小者は実に枚挙にいとまがないほどで、匪のいないところは殆どなく、夜に火のない所もない。騒乱は、鎮、内、召、裕、唐、泌の六県が甚しかった」と述べられており、これら「土匪」のもつ銃弾の出所としては、軍隊から奪つたもの、人質の身代金や強奪、贈呈や購入によつて得たもの、さらに、高価な値段で軍

【地図2】 1913年8月初め～8月20日頃までの河南省西部の「土匪」＝革命軍】



- A** 白朗率いる二千～三千人
その一軍は東南より安徽へ入り、穎、毫の「匪徒」と結託。
- B** 白瞎子、宋老年、張起雲、張建徳、李鴻賓、陳奠生、海建功、黄誥三、于占海、丁万松は各々千数百人を率いて流寇
- C** 野人姓、翼長庚、王十三、王海彦
- D** 温振清、馮少林、王老十、石立富
- E** 張三喜、王傳薪、劉二刀子、馬四老官、常中海、曹九朴、曹紅王、王承敬
- F** 龔硯章、龔貨冠、劉八王、庚寿才
- G** 張黒子、夜黒耀、余四娃
- H** 李和尚
- I** 陳殿升、二千余人で嵩県の東村と孫家鎮を八月初旬に占拠
- J** 丁長江の七百余人
- K** 申心寛、趙得勝、紅登科等、八百余人を率いて8月15日に洛陽の彭婆、竜門等を占拠。

*「王天佑条陳」1913年8月10日、「王天縱呈段祺瑞報告」1913年8月23日（『白朗起義』所収）を参考に作成。

隊や城防營から得たものという説があり、当時、ニュースを
探して南陽にいた外国人の手紙によると、「兵匪の感情は甚だ
よかつた」。また、「人民の多くは匪がいる時は、兵にわいろ
を送つた」といふうわさもあつた。⁽³³⁾ 当時の河南で、兵と「匪」
は行つたり来つたり友人の交際に等しく、部外者からみれば
確かに兵と「匪」なのだが、その実、かれ等は親友であると
いつた関係、また、「窮乏して苦しい家が甘んじて盜賊をかく
まい、乞食や游民が自ら願つてそのスパイとなる」「貧苦の小
民はみな大いに歓迎し、樂しみてその耳目となる」という民
衆と「土匪」の関係については、すでに述べたとおりであり、
このような基盤の上に、数多くの民衆起義が恒常的に、慢性
的に勃発していたのである。⁽³⁴⁾ 八月二日に北京へ戻つた王
天縱は、「汝、洛一帯、ことごとく、土匪の盤踞せる所とな
り、その騒々しく、横暴なること、惨にしてこの世が闇にな
つたかのような」ありさまを述べている。

このように、広いすそ野をもつた同盟軍と民衆の支持のも
とに、白朗は「洪漢軍大都督」、「南軍大都督」などを名のり、

「中華民國撫漢討袁司令大都督白」の名義で、次のような告
示を出している。⁽³⁵⁾

中華民國撫漢討袁司令大都督白は以下のように思う

滿はすでに命運つきたが、○賊は命に従つて権力をも

つ。我国には今、官印（国の意）なく、定められた課

税が何の役にたとうか。○賊がすべて一人占めをし、

わざと民国の名をあげるふりをしているのだ。我が軍

が地方に來たとき、人民は決して逃げてゆかなかつた。
今は中州の真主（真に天子たる資格ある天子）にして、
蕩々として天神に等しい。

大漢癸丑の年

告示

この告示は、半尺平方の唐紙の上に書かれており、北洋軍閥
陸軍部が白朗起義軍を鎮圧した時のこまごました手紙や電報
と一緒に保管されていたもので、某地で白朗起義軍が貼り出
した告示を抄録したものである。○の部分、袁世凱
の「袁」の字で、この文書を提出した者がはばかつて、この
字を取り除いたものである。この告示は、非常に原初的なも
のであるが、素朴に、明確に、袁世凱にのつとられつつある
民国の実態と、民衆がそれをいかにうけとめているかを示し
ている。ちなみに、李鴻賓、宋老年、丁万松、宋一眼、王傳
心等と連合した白朗は、七月初めには「洪漢軍大都督」を名
のつていたが、新野県で王添倉、魏宏義らの「土匪」が銃殺
された時、民衆がその死体に「洪漢軍」と書かれた布をかけ
たという話にも⁽³⁶⁾ 白朗と「土匪」の関係、民衆の「土匪」に
対する思いをうかがうことができる。民衆は「土匪」を支持
し、白朗軍が入つてきた時にも逃げず、民衆に支えられて、

白朗は「中州の真主」の如き、「天神」の如き力を發揮し得た
のである。彈圧側の河南護軍使雷震春は憎しみをこめて言う。

白匪はまた仁義を行うと偽りて、貧民によく思われ、自ら

「洪漢軍大都督」と称す。たまたま新聞に贛（江西省）、皖

（安徽省）二省が中央に反抗したことが載ると、該匪もま

たてたためどうそつぱちの「二次革命」の説に付和雷同し、互いに相呼応した。このたび唐県を攻破し……ますます誰はばかるところのないありきまで、仲間威風を示し……破竹の如き勢いである。一時、遠近に伝播したうわさにおじけ、貧民は一たび白朗の名を聞けば、ほとんど寒からずして慄える状態である。⁵⁷

また、王天縦は言う

白朗は現に匪党を統べて汝州、魯山盧溝山一帯へ逃げ入り、放火、殺人、略奪しており、むごたらしくて言うに堪えない。さらに、南方は運動員を派遣して各處へ赴かせて連絡したり鼓吹したりしているが、それは大挙を凶らんがため、目じるしとした旗の上には「南軍大都督」の文字が書かれている。河南の軍隊が南方へ派遣されてよりのちには、該匪等はますます忌憚なく、「二次革命」を言明して、ほしのままに生き埋めにして殺したり、彼等の過ぎる所は往々にして廢墟となり、父老子弟の遺された者はない状態である。⁵⁸

雷震春護軍使や京畿一帯稽查長の王天縦らは、このように、第二革命時の白朗らの活動を悪意を以て中傷しているが、このことは逆に、権力者側にとって白朗らの活動がいかに彼等に敵対するものであったかを示している。そして、白朗らの蕩々たる活動を阻ぎ得ない焦慮の中で、権力者内部の矛盾も顕在化してくる。周符麟は袁世凱や段祺瑞に何度か張鎮芳批判の電報を送っているし、⁵⁹ 白朗の帰順問題をめぐって王天

縦と張鎮芳とは厳しく対立している。⁶⁰ 七月二二日参謀部、陸軍部が河南都督張鎮芳にあてた電報は、王天縦が「白狼は官軍と戦っているが、その武器や戦闘力には恃むものがある。今、南方が平穩ではなく必ず中にたつて運動するものがある。こちらが用いずして、匪の用に資するは、まことに惜しむべきである。天縦は旧部を率いて南下し、白狼を帰順させ、乱党と雌雄を決せんことをお願いする予定である。」と申請しているが、これについてどう思うかというものであった。この電報を受け取った張鎮芳は烈火の如く怒り、翌日には折り返し参謀部、陸軍部に打電して、「河南軍界に人なきを恥ずといえども、王天縦に鎮圧、帰順をなさしめる理由は断じてない。王の旧部下はわずかに二營で、荆紫関さえも守ることができないのに、どうして匪を制する余裕があるうか」と述べ、王天縦の弟、王天佑がなかなか交戦しないとあたりちらし、「一白狼を収むるも、千百の白狼、風を聞きて立ち、もし乱党の用をなせば、いつそうこれを誅し難い」と述べている。確かに、この当時、少なくとも河南西部は「千百の白狼、風を聞きて立つ」状態であった。そうした中で、王天縦やその帰順政策に対する「土匪」の答えはいかなるものであったろうか。

辛亥革命時、「革命の健児」王天縦は河南省の西北部、嵩県一帯を基盤としていた。そして今、ここには、「土匪」陳殿升や黄高山がいた。陳は去年十一月に浙川県の防営や馬文徳や王天佑等に捕えられ、南陽へ護送される途中、警備のすきを

ついで逃亡したが、今は二千余人を率いて、八月初旬に嵩県の車村と孫家鎮を占拠していた。また、黄は「巨盜」李永魁の仲間の生き残りで、今三百余人をつれてすでに嵩県の牛頭溝に隠れ家をつくっていた。王天縦配下の稽查員田易畴（田范九）は休暇をとって郷里に帰って陳殿升に捕えられたまま行方不明となる事件があったが、これは王天縦への「土匪」のうらみによって起こったものであった。つまり、去年（一九一二年）、王天縦の警告を受けて鎮嵩軍が「土匪」を探し出して捕えることを宣言したが、彼等「土匪」は皆、王天縦におとし入れられたとうらみ、王天縦が袁世凱の下で出世したことがさらにうらみを深くした。王天縦は八月二三日に段祺瑞に打電して、彼等「土匪」が「ただ縦の家族を滅ぼすだけでなく、縦の町や村を廃墟とすることをとおっぴらに言明しました。すみやかにありのままを上申したので、ただちに挽回策を講じて救済していただければ幸甚です」と泣きついでいる。「白朗の乱にみる辛亥革命と華北民衆」（『中国民衆反乱の世界』所収）の中で述べたように、辛亥革命後、革命軍変じて官軍となった鎮嵩軍は「人の情形、地理」を熟知していることを利用して「匪」を誘引、殺害する最も悪質な弾圧軍となった。革命の続行をあくまで願う李永魁の路線と、「共和」体制護持の政府軍として「永久に匪類を根絶させる」ために「誓って嵩洛匪徒を肅清するを任とする」路線との、生死を賭けた壮絶な戦いが、この地で展開され、「劇匪」李永魁は一九一二年一月二四日に捕えられて首を切られた。「土匪」は

このうらみを忘れない。陳殿升と黄高山ら「土匪」は、王天縦こそがその禍根ととらえている。「中州の大俠」王天縦が革命後、袁世凱に誘われて、建忠の名をもらい、陸軍少将の位をもらい、京畿一帶稽查長に任命されたことが、どのようなことなのか、自分たち「土匪」にとってどのような意味をもつものなのかを、「土匪」自体が身を以て体験していた。従って、王天縦が白朗を投降させようとしても、それは白朗にとっては単なるお笑い草にすぎない。北方に組する王天縦と南方以上に袁世凱に敵対しようとする白朗との間には、もはや飛びこえられない深い溝があるのみだった。

註

(1) 「白狼近史」支那四一七、大正二年九月一日、「地方通信」申報一九一三年七月一日、「各省政潮」民権報一九一三年七月一日など。

(2) 「白狼之勢滔天」順天時報一九一三年七月二日、「白狼之勢滔天」時報一九一三年七月二〇日。

(3) 「漢口特電」民立報一九一三年七月一日。

(4) 「呂調元条陳」一九一三年七月一日。（『白朗起義』二二頁）

(5) 「風潮後の湖北」支那四一五、大正二年八月一日。

(6) 「白狼攻鄖之自退」順天時報一九一三年八月一日、時報一九一三年八月九日。

(7) 「鄂省党人失敗史」申報一九一三年八月一日。「党人猶不忘情於武漢」同右、一九一三年八月三十一日。中

国民党中央委员会党史委员会『革命人物誌』第六卷、四八一頁。

- (8) 「河南通信」時報一九一三年七月三日。
- (9) 「贛乱声中之河南」順天時報一九一三年七月二十九日、「河南通信」河南破壞之風声鶴唳」同七月二十三日。
- (10) 「南京電報」民立報一九一三年七月二十八日。
- (11) 「河南近狀紀」時報一九一三年八月一日。
- (12) 『鄒永成回憶錄』、近代資料一九五六—三。(王宗虞「試論白朗起義的性質」史學月刊一九六四—一二、所收)
- (13) 張繼「熊嗣鬻」。(『革命人物誌』第九集、三四八—三四九頁所收)
- (14) 「袁世凱致張鎮芳電」一九一三年七月二十八日。(『白朗起義』二六頁所收)
- (15) 「大總統令——責成勸匪各軍隊搜捕豫省土匪」(『政府公報分類彙編』弭乱、五二—五三頁)
- (16) 「河南特信——白狼亦要為都督」順天時報一九一三年七月二十六日、「河南通信——白狼之四面八方」同右七月三十日。
- (17) 「白狼匪勢之猖厥」申報一九一三年一月一五日。
- (18) 「任耀武稟張鎮芳」一九一三年五月二二日。「雷震春致袁世凱」一九一三年六月三日。(『白朗起義』一三三頁、四九頁所收)
- (19) 「黎元洪致袁世凱等電」一九一三年六月二〇日。(『白朗起義』五二頁所收)
- (20) 「白狼肆擾象南一班」申報一九一三年六月二五日。
- (21) 開封師範學院、河南歷史研究所『白朗起義調查報告』開封師範學院學報一九六〇—一(王宗虞「試論白朗起義的性質」史學月刊一九六四—一二、所收)
- (22) 「黃興致白朗函」一九一三年七月二〇日。(『白朗起義』二二六頁、所收)
- (23) 「河南通信——河南破壞之風声鶴唳」順天時報一九一三年七月二十三日。「九日申刻開封專電」時報一九一三年八月一〇日。
- (24) 王宗虞「試論白朗起義的性質」史學月刊一九六四—一二、二二二頁。
- (25) 「王毓秀致張鎮芳電」一九一三年七月二十三日。(『白朗起義』二四頁所收)、「豫軍槍斃白狼捷電」順天時報一九一三年八月二日、時報一九一三年八月六日。
- (26) 「白狼攻鄆之自退」順天時報一九一三年八月一七日、時報一九一三年八月九日。
- (27) 「河南電報」民立報一九一三年八月一日。
- (28) 同右、一九一三年八月一八日。
- (29) 『重修正陽縣志』卷四、人物、三六—三七頁。
- (30) 「各省政聞——河南白狼猖厥之由」北京日報一九一三年五月二八日。
- (31) 「張鎮芳未來之彈劾」申報一九一三年七月六日。
- (32) 「白狼肆擾豫南之一斑」申報一九一三年六月二五日。

(33) 「王毓秀致張鎮芳電」一九一三年七月三一日。〔白朗起義〕二七頁所収〕

(34) 『革命人物誌』第九集、三八〇—三八一頁と鄒魯「河南拳義」(中国史学会主編『辛亥革命』(七)、上海人民出版社、一九五七年、三五二頁—三六〇頁)

(35) 「河南都督張鎮芳咨呈國務院報明拿獲破壞黨閻子固等審辦各情形文」(『政府公報分類彙編』弭亂、九一—九二頁)、詳誌河南亂党十六人伏誅事」北京日報一九一三年十月一八日、「河南通信—河南大批亂党槍斃特誌」順天時報一九一三年十月二日、時報一九一三年十月一五日など。記載内容はほぼ同じである。

(36) 「河南通信—新蔡亂事已平」順天時報一九一三年八月二一日、時報一九一三年八月二三日。「河南通信—新蔡之亂如此」順天時報一九一三年八月三一日。「河南省最近要聞—新蔡亂党潛逃」北京日報一九一三年九月三日。「河南亂党之狼狽」時報一九一三年九月九日。

(37) 「河南亂党之爪蔓」北京日報一九一三年十月一六日、時報一九一三年十月一一日。「詳誌河南亂党十六人伏誅記」北京日報一九一三年一〇月一八日。

(38) 「白朗の亂にみる辛亥革命と華北民衆(上)」(青年中国研者會議編『中国民衆反亂の世界』汲古書院、三〇頁)

(39) 「河南□批亂党鎗斃特誌」時報一九一三年一〇月一五日。

(40) 「河南亂党之爪蔓」北京日報一九一三年一〇月一六日。「拿獲開封縣知事」北京日報一九一三年一〇月八日など。

(41) 「詳誌河南亂党十六人伏誅事」(北京日報一九一三年一〇月一八日)には、張蓉芙(張華仁)、劉玉(劉玉亭)、徐懷友、楊萬青(楊廷選)、馬漢傑、王龍韜、楊英彦、龔萬倉、李世魁、龔傑(保?)志、王澤普、王桂芳、何東藩、劉振海、趙銅山の供述が載せられている。なお、時報一九一三年一〇月一五日、順天時報一九一三年一〇月一二日にも同様の記事がある。

(42) 前述したほかに、例えば河南の第二革命で活躍した人としては、岳城店の人で汝南泌陽正陽の学校の教員であった于衡章(字は徳軒)や河南同盟会会員として辛亥革命の時にも活躍した魏松声(字は春源)などがある。前者は、辛亥革命後、明港軍捐局長として鉄道線に就職していたが、第二革命時には、ひそかに鉄道を叩き毀す道具を買って、袁軍に抵抗しようとし、さらに隣県にも奔走して、夏震程や潘文軒等とも連合して討袁起義を起こそうとしたが、事漏れ、害にあった。三三才だった。後者は、朱丹陛や會可樓、杜扶東(界か?)等と一緒に多倫へ行き、鎮守使と耿合して、ひそかに第二革命を凶った。革命後は母の喪のためひきこもっていたが、張勳復辟の際に再び活躍した。

(43) 「風潮後の湖北」支那四一五、大正二年八月一日。

- (44) 「白朗の乱にみる辛亥革命と華北民衆」(『中国民衆反乱の世界』四七頁)
- (45) 「漢口特電」民立報一九一三年七月一八日。
- (46) 「白朗起義調査簡記」史学月刊一九六〇—二、二三頁。
- (47) 「河南電報」民立報一九一三年七月二三日。
- (48) 王宗虞「試論白朗起義的性質」史学月刊一九六四—二二、二三頁。
- (49) 「河南通信——新蔡之乱如此」順天時報一九一三年八月三十一日。
- (50) 「河南通信」時報一九一三年九月四日。
- (51) 「襄陽電報」民立報一九一三年八月六日。
- (52) 「河南電報」同右一九一三年八月三十一日。
- (53) 「王天佑条陳」一九一三年八月一〇日。(『白朗起義』二八頁所収)
- (54) 「王天縱呈段祺瑞報告」一九一三年八月二三日。(『白朗起義』六一頁、六二頁所収)
- (55) 『白朗起義』二二三頁。
- (56) 申報一九一三年六月二二日。
- (57) 「雷震春呈陸軍部報告」一九一三七月五日。(『白朗起義』五六頁所収)
- (58) 「王天縱呈段祺瑞報告」一九一三年八月二三日(同右、六二頁所収)
- (59) 「周符麟致袁世凱、段祺瑞」一九一三年七月四日、七月六日。(同右、五五頁、五八頁所収)
- (60) 「參陸兩部致張鎮芳電」一九一三年七月二三日、「張鎮芳復參陸兩部電」一九一三年七月二三日(同右、六一頁所収)